

トータルケアNEWS

No.68 2018.3.31

発行 社会福祉法人 秋田県社会福祉協議会
〒010-0922 秋田市旭北栄町1-5
TEL 018-864-2714 FAX 018-864-2742
URL <http://www.akitakenshakyo.or.jp/>
E-mail chiiki@akitakenshakyo.or.jp

CONTENTS

「福祉教育推進」に向けた社協の実践
・ 八郎潟町社会福祉協議会
・ 湯沢市社会福祉協議会
・ 横手市社会福祉協議会

福祉教育推進に向けた社協の実践 ～「福祉教育推進セミナー」から～

地域共生社会の実現に向けて、地域住民の意識を「他人事」から「我が事」に変えていくためには、「福祉教育」が重要となります。

平成29年7月14日、日本福祉大学の野尻紀恵准教授を講師に迎え、「平成29年度福祉教育推進セミナー【前期】」を開催しました。セミナーでは、地域住民等を対象にした「無関心から関心へと変えるプログラム」、中学生を対象にした「セーフティネットを知るプログラム」について御指導いただきました。これらのプログラムを参考とし、実際に福祉教育に取り組んだ社協から、「福祉教育推進セミナー【後期】」（平成30年2月27日開催）でそれぞれの実践を発表していただきました。

ここでは、各社協が取り組んだ福祉教育実践の内容をご紹介します。

◆八郎潟町社会福祉協議会

「高校との連携による福祉教育の実践」

□ 目的

八郎潟町ではボランティア数が過去5年間減少しており、将来を担う子どもや若者が地域福祉に関心を持つようにしていくためには、子どもの頃から「ふだんのくらしのしあわせ」を考えていく福祉教育の取り組みが必要である。

また、日本老年学的評価研究（JAGES）により、一人で食事をとる機会が多い高齢者ほど鬱病になりやすいという研究結果が2015年に発表され、誰かと食事をとる人に比べ、男性は2.7倍、女性は1.4倍と高い結果になっている。単身高齢者

が急増する中、多くの人と会話を楽しみながら食事をする「共食」が注目されている。高齢者が鬱病になると閉じこもりがちになり、身体機能が落ちて生活不活発病になりやすく、ひいては認知症を発症するリスクが伴うことから、「共食」の機会を広め、高齢者の健康維持、生活の質（QOL）の向上につなげることは介護予防としても重要である。

そして高校生が「共食」に参加することで学びの機会となるような企画とした。

| | 全体数 | 男性 | 女性 | 団体数 | 個人 |
|-------|-------|-----|-------|-----|----|
| 平成25年 | 1,864 | 623 | 1,163 | 14 | 42 |
| 平成26年 | 1,772 | 609 | 1,083 | 14 | 42 |
| 平成27年 | 1,637 | 562 | 997 | 12 | 33 |
| 平成28年 | 1,540 | 594 | 946 | 12 | 37 |
| 平成29年 | 1,518 | 557 | 961 | 16 | 39 |

八郎潟町のボランティア数の状況

□ 内 容

配食サービスとふれあい安心電話の利用者を対象にした「ぬくもり交流会」（年1回開催）に、「男の料理教室」の参加者と県立金足農業高校の生徒たちへの参加を働きかけ、3つの事業を共同で実施した。

料理教室の参加者は、一年間磨いた料理の腕を披露する機会となり、高校生は、生活支援技術の授業の一環として、①共食と介護予防を理解する、②バスに添乗しての送迎介助を体験する、③高齢者に優しい食事を考える、④社協の事業・取組みを知る、機会となった。



みんなで盛り付け

□ 成果と課題

3つの事業をコラボしたことで、各々がより良いものになり、大きな成果を得ることができた。

- ①人に喜んでもらえると嬉しくなり、自己有用感を得られる。
- ②参加者が互いに関り、ともに体験することで福祉に対する理解を深められる。
- ③学校教育法、学習指導要領等の規定により、教育現場に入り込むことは難しいと考えていたが、学校の特色等を考え、それに沿った事業・活動であれば理解と協力が得られる。



楽しく食事

- ④若者に高齢者と関わる機会を提供することで人手不足の介護現場の担い手の

確保につながる。

⑤高校生、社協職員ともに気づきや学びがあり、双方に新たな発想が生まれる。

参加した高齢者の皆さんと高校生からの意見は次のとおりである。

【高齢者から】

- ・若い人と触れ合うと元気になる。楽しかったよ！ありがとう
- ・10歳も若返った、これで10年は長生きできる
- ・みんなで一緒に食べると美味しい
- ・社協の職員もいいけど若い人いいなあ～、また来年もやってくれ
- ・来年も参加できるように健康でいたい など

【高校生から】

- ・高齢化が進む中、元気な高齢者と楽しく交流するのは大事
- ・介護だけでなく楽しい生活を支える福祉の仕事もあることに気づき、やってみたいと思った
- ・喜んでもらえて嬉しかった
- ・美味しいご飯を皆で一緒に食べることも介護予防になることを実感した
- ・人との交流で気持ちが明るくなることを実感し、地域で声かけやあいさつを進んで実行したい
- ・福祉の楽しさと、やりがいを感じる事ができた
- ・こういうイベントは、高齢者の生活の力になると思った
- ・このような交流を増やしていけば、寝たきりになる人が少なくなると思う
- ・自分も一人暮らしの祖母がいるので、もっと元気になるよう支えていきたい など

一緒に料理した“男の料理教室”の皆さんも社会貢献につながり、充実感や達成感を得たようである。

□ 今後の展望

この活動から、若者が福祉に触れ、感じ、自らの意思でボランティア活動に取り組み、福祉の町づくりの一助となることを期待している。

平成29年度には、若者を福祉に巻き込もう！第二弾として「若者ぼらんていあ塾」を立ち上げ、現在11名の高校生が登録、活動している。

少子高齢化が加速している昨今、地域社会・地域福祉の担い手である若者は貴重な社会資源である。この実践を通じて、福祉教育が少子高齢化に起因する社会の変化に対応するために重要な取組みの一つであることから、引き続きこうした活動を進めていきたい。



うたって踊って！！

◆湯沢市社会福祉協議会

「小学校と連携した福祉教育の実践」

□ 目 的

三関地区は特産物が有名で、伝統行事も絶えることなく続いており、つながりが強い地域である。地区で唯一の小学校では、自然を生かした体験活動が多いが、人と人とのつながりや暮らしに関する身近な福祉の取組みを知り、小学生が地域の一員として地域に関心を持ち、思いやりを育み、地域で暮らす幸せを感じられることを目的に福祉教育の実践を行った。

□ 内 容

三関小学校5年生9名を対象に、学校の授業で地域の福祉について考えるため、民生児童委員10名の協力を得て、2日間、延べ2時間のワークショップを実施した。

【1日目】

①2グループに分かれて自己紹介を行った。

(自己紹介の中で民生児童委員の仕事や地区社協の事業を紹介する。)

②三関地区に関するクイズを行った。

(クイズ内容は民生児童委員の協力により作成した。)

③全員で三関地区のいいところ、不便なところを見つけ、ふせんに書いて模造紙に貼り付けた。

作業後、県立湯沢翔北高校の生徒が企画、商品化した地元名産品を加工したお菓子和干し柿を試食し、内容の振り返りを行った。



いいところは？

【2日目】

①グループ内の民生児童委員より、民生児童委員の活動や地区で行われている福祉活動について説明した。

②小学生がどう感じたか、小学生はどんなことができるかを話し合い、1日目の活動をもとに模造紙にまとめた。

③班ごとに発表を行った。

④小学生、民生児童委員、教員、社協職員全員による感想を発表した。

なお、事業実施にあたり、事前に民生児童委員に協力を依頼して目的を説明するとともに、ワークショップの進行について打ち合わせを行い、地元ならではのクイズの作成などワークショップのイメージを統一した。

また、事業終了後には三関地区センターに模造紙を貼り、地域住民に紹介したほか、地域の交流会に参加し、スライドを使用して活動の紹介を行った。



班ごとに発表

□ 成 果

- ・ワークショップでは、高齢者や障害者の不便さを捉えるだけでなく、商店が少ないことや危険な個所の発見を通じて、自分たちの生活や環境などの問題点を考えることができた。
- ・地域の課題に関する今後の取組みを考える中で、地域住民と協力することや問題を大人に伝えることも福祉の力になることを知った。
- ・資源、伝統、福祉のつながりを知り、誰もが地域に見守られていることで地域共生社会のあり方を考えることができた。
- ・学校と民生児童委員の間では、「面識がある」から「共に考え、連携する」関係ができた。担任の教員からは、「自身の父親も近くで一人暮らしをしている。自分のこととして捉える機会ともなった。」との感想をいただき、福祉教育による気づきを感じることもできた。



地域の問題を考えよう

□ 課 題

- ・授業の中で、体験型だけではない福祉教育を取り入れていくためには、学校側に福祉教育の内容を説明し、理解してもらうことが必要である。
- ・学校と連携して実施するためには、事前に教育委員会に説明を行うことが効果的である。
- ・大規模な学校での福祉教育の進め方については、内容や連携・協力する機関等について工夫が必要となる。
- ・地域住民の福祉教育については、学校での取組みと並行して実施する必要がある。

□ 今後の展望

学校での福祉教育を地域と共に進めていくことで、地域共生社会について理解する機会となることから、事業のアプローチ方法を多方面から考え、学校、町内会など地域全体で福祉教育を実践していく必要がある。

◆横手市社会福祉協議会

「災害ボランティア活動を通じた福祉教育」

～災害にも強い地域づくりのために～

□ 目的

平成29年7月に発生した秋田県大雨災害では、早期に災害ボランティアセンターを設置できたことや被災地域が集中していたこと、たくさんの地域住民やボランティアの協力があったことで早期終息につながった。しかし、大規模で広域的な災害が発生した場合でも迅速な対応や早期復興につなげるためには、地域を支える人材育成や住民主体の日常的な支え合い、助け合い活動がより重要となることから“災害にも強い地域づくり”を推進するための研修を実施した。

□ 内容

身近に発生した災害への対応と災害時に求められる支援方法などを学ぶため、災害ボランティア活動実践研修会を実施した。

①大雨災害に伴うボランティア活動について

- ・平成29年7月に発生した秋田県大雨災害の被害状況や災害ボランティアセンターの運営状況などを説明した。



炊き出し体験

②炊き出し体験について

- ・婦人会の指導のもと、コンロ一体型の炊き出し用鍋とポリ袋を使った炊飯を体験した。

③横手市で起こりうる災害とその対応について

- ・過去に発生した、又は今後起こりうる災害と対応方法などを説明した。

④災害ボランティアセンターの目的と内容について

- ・防災や災害時に求められる支援と災害ボランティアセンターの役割などについて講義した。
- ・模擬災害ボランティアセンターを開設し、一連の流れを体験した。

□ 成 果

身近で起こりうる災害や実際に地元で発生した災害の状況と対応方法を知ること、地域の支え合いや助け合いの必要性を再認識し、協議体構成員、ボランティア、民生委員、福祉協力員、高校生、施設・事業所職員など様々な分野や世代が参加し、災害にも強い地域づくりの一助となった。また、外部講師による専門的な講義を受け、災害ボランティアセンターの模擬運営を体験したことで市社協職員のスキルアップにつながった。



炊飯体験

□ 課 題

講義よりも体験型の内容について参加者の反応が良く、質問も多かったことから、内容や時間配分について今後の取組みに反映させたい。また、当日の天候の都合で参加者が大幅に減ってしまったため、開催時期や日時等についても配慮が必要である。

□ 今後の取組みの展望

今回は“災害にも強い地域づくり”を目的として福祉教育を実施したが、日々目まぐるしく変化していく福祉情勢及び地域課題は多岐に亘っている。そのため住民一人ひとりが役割を持ち、住み慣れた地域で安心して生活していけるよう、ネットワーク活動やいきいきサロンなどの住民に身近な各種事業や活動を通して福祉教育に取り組み、住民が地域課題を我が事として捉えるきっかけを作り、地域共生社会の実現に近づけていきたい。



模擬災害ボランティアセンターの受付